

## EMBL Symposia -Non-Coding Genome-への参加報告

生命環境科学系 渡邊雄一郎研究室

博士課程3年 都筑正行

今回、広域科学専攻の博士渡航助成制度を利用し、ドイツのハイデルベルクにある欧州分子生物学研究所 (EMBL) にて 10/18~10/21 に行われた国際学会、EMBL Symposia -Non Coding Genome- に参加してきた。EMBL symposia は、分子生物学に関連した1つのトピックスで月に一回程度行われている国際学会であり、ヨーロッパを中心とした世界中の研究者が集う最先端の研究を発表しあう場である。今回は、ノンコーディングな DNA 領域、RNA 分子を中心とした発表が多く為され、非常に活気あふれるものだった。

ノンコーディングとは、分子生物学の中心命題である DNA→RNA→タンパク質という分子・情報の流れ=セントラルドグマから逸脱したものとして定義され、ゲノム時代の到来以降、分子生物学の大きな流れとして注目度は今も増している分野である。私の専門は、ノンコーディングな RNA 分子の1つ、small RNA であり、本学会ではポスター発表を通じて、同年代の若い研究者から、研究室を構える研究者まで、様々な人と議論を交わすことができた。中でも、同世代の学生、ポスドクなどとは長い時間お互いの研究について話すことができ、普段閉じこもりがちな環境でもある研究室では感じることのできない新たな視点を感じる事ができた。また、海外の有名な研究者への質問を通じ（昼夜共に食事が出されたため、食事の場でフランクな会話を行うことができる）、発想力や、現象に対する疑問の出し方などを感じる事ができたのが大きな収穫であった。個人的に現在当分野にて最も盛んに行われている解析は、RNA とタンパク質の相互作用を、生化学的手法と次世代シーケンサーの網羅的な塩基同定を組み合わせるものであった。技術と予算が必要なものであるが、今後自身も取り入れていきたいと考えている。最後に、ドイツ市街地（ハイデルベルク・フランクフルト）の観光も到着後、出発前に少し行うことができ、充実した日程だった。国際的な視野を持って、今後も研究し勤しんでいきたい。



学会会場



ハイデルベルクの町並み